

平成26年度男女共同参画推進講座
『男女共同参画の視点で作る避難所ワークショップ』
報告書

日時 平成26年11月7日（金）10時～12時
場所 柴田町保健センター4階 軽運動場兼会議室
講師 「せんだい防災プロジェクトチーム」から8名
参加者 61人（別紙名簿）

【事業の目的】

東日本大震災など大災害時の被災生活における性別や立場の違いによる困難を理解し、課題解決に実践的に取り組むことで、男女共同参画の視点から地域防災力の向上を図る。地域防災の多様性に配慮した避難所運営をワークショップ形式で学び、また、防災分野における男女共同参画の視点を地域に広く浸透させるため、当町においても地域のリーダーまたはプロジェクトチーム発足のきっかけとしたいとして実施。



【実施した内容】

ワークショップは8～9人のグループ形式。
各グループが、避難所の運営委員会と仮定し、以下の5つの課題について対応を検討した。その対応策をグループごとに発表した。

①生理用品や女性の下着が支援物資として入ってきましたが、物資係から「生理用品をなかなか取りに来ない。間に合っているのかな・・・」と言われました。

→配布の仕方に問題がある。男性ではなく女性が配布する。

女性専用のスペースに置く。

女性リーダーがアンケートを取りニーズを把握。直接配布。



男女混合で見回りチームを作る。

②避難所内で盗撮をする人がいるらしい、とうわさになっており、女性や子どもから「夜に、外にある仮設トイレに怖くて行けない。」と言われました。

→ホイッスルを配る。警察に巡回を依頼。
トイレを男女別にする。トイレの場所を明るいところに移動。

③女性たちが食事係として、食事を公平に配給するために毎日頑張っています。しかし、「係の人が多く取っているのではないか？」とうわさになっており、食事係を辞めたいという人も出てきました。

→固定せずに当番制にする。

みんなの見えるところで配膳する。

食事係が女性と思われがちなので、男女共同で行う。



④「赤ん坊の夜泣きがうるさくて眠れない。明日も朝早くから仕事なので、なんとかしてくれ。」という訴えがありました。

→赤ちゃんがいるお母さんをグループにする。個室を準備。

ストレス解消の機会を与えたり、託児コーナーを準備する。

事例:「赤ちゃんの泣き声、生きている声、うれしいね」というポスターを貼った。

⑤DVを受けて夫から逃げている女性がおり、「誰かが訪ねてきても自分がいることを教えなくてほしい。」と言われました。

→別名簿で管理。避難所カードを作成（名簿非公開の希望）。

20人位のグループごとにリーダーを置き、情報を集める。一人で対応しない。窓口を一本化。



東日本大震災では、普段できないことは非常時にもできないということ、多くの避難所で実感した。大変だったけどこれを生かそうということで、このプログラムが作られた。東日本大震災を教訓とし、次の大災害では、いろいろな人がかかわって、多様性に配慮した避難所ができてほしい。

【アンケート結果】

参加者全員にアンケート用紙を配布し、講座終了後に回収した。

●アンケート回収数 50件 ●アンケート回収率 82%

➤この講座を何で知りましたか？

お知らせ版	9	18%
ホームページ	1	2%
ダイレクトメール	22	44%
知人・友人などから	6	12%
その他	10	20%
無回答	2	4%

お知らせ版やホームページで周知したが、ダイレクトメールが一番効果があった。

➤この講座を受講しようと思ったきっかけは何ですか？（2つまで）

男女挙動参画に関心があるため	16	24%
避難所運営など地域防災に関心があるため	46	68%
何か新しいことに参加してみたいと思ったため	2	3%
家族・友人に誘われたため	0	0%
その他	1	1%
無回答	3	4%

参加者は地域防災についての関心は高く、これと男女共同参画を結びつけた講座を行ったことは、男女共同参画の推進に効果があったと思われる。

➤講座の内容はいかがでしたか？

大変良かった	33	66%
良かった	16	32%
良くなかった	0	0%
無回答	1	2%

参加者のほとんどは、講座内容に満足いただけたと思われる。

➤「せんだい防災プロジェクトチーム」のような団体は、柴田町に必要だと思いますか？

必要だと思う	39	78%
必要ではない	1	2%
わからない	10	20%
無回答	0	0%

「必要だと思う」が78%と非常に高く、防災への関心の高さと、地域のリーダーが求められていることがうかがえる。

➤「せんだい防災プロジェクトチーム」のような団体が柴田町でできるとしたら、あなたは参加したいですか？

参加したい	31	62%
参加したくない	3	6%
わからない	15	30%
無回答	1	2%

「参加したい」が多く、参加者の積極性が伺える。今後、地域のリーダー養成には、この回答者をピックアップしていくことが効果的だと思われる。

【まとめ】

普段、何気なく過ごしていることも、災害となれば多くの困難が待ち受けている。よりよい避難所を運営するためには、男女共同参画の視点で物事をとらえ、多くの「気づき」が必要になることを、ワークショップを通して学んでいただけた。

講師に招いた「せんだい防災プロジェクトチーム」は市民有志の団体ということもあって、講座の内容も参加者にとって身近に感じているようだった。

アンケート調査を行った結果「せんだい防災プロジェクトチームのような団体が柴田町にも必要か」の問いでは78%の人が「必要だと思う」と回答。また、「せんだい防災プロジェクトチームのような団体が柴田町できるとしたら」の問いには62%の人が「参加したい」と回答しており、参加者の地域防災に対する意識が非常に高かったことから、当初の目的を達成できたと言える。